



平成31年2月26日

佛教大学附属幼稚園



「行事—そだちのふし目」

園長 田中典彦

梅の花が春の到来を告げると、木々の枝に新しい芽がスタートの準備を始める季節となります。季節という節目です。

やがて園長とならせていただいで一年となります。不慣れな者を子どもたちは自然に仲間に迎え入れてくれたと喜んでいきます。このころになると、年長のみならずから聞こえてくるのは、小学校のことです。先日も昼食を一緒にいただいでいると、「僕は広沢小学校へゆくんだよ、この子は何々小学校だよ、〇〇ちゃんは別の学校、みんな一緒だといいいのになー。」ちょっとさびしい気持ちもあり、そして楽しみでもあるような会話です。

幼稚園では、年長組の園児は小学校へと進み、年中、年少組の子どもたちはそれぞれ上の級に進みます。このような年度の変り目は、いろんな式典行事によってけじめをつけることになっています。卒園式、進級式、入学式などです。そしてさらに人生にはいくつかのふしめがあります。竹がひとふしひとふしを刻みながら成長してゆくのと同じように、人もまた時々のふしを重ねて人生の歩みを続けて成長してゆくわけです。

行事は催しなどいろんな意味をもつようになりましたが、仏教の教えの中では「行」は、サンスカラ（形成力）といい、新たなものを創造するはたらきや意志による形成力とされています。ですから行事は、意思形成をすること、つまりその気になって事に当たってゆこうと心を調えることほどの意味となります。単純に整えられた式典をとおして、今までの自分の在り方にけじめをつけ、そして新たな在り方へと向かってゆく心構えをすることなのです。いわば心機一転ということ。卒園と入学は子どもさんたちには大きなふしめの行事です。

そこで卒園してゆく皆さんに、贈る言葉を書いておきます。

「花一輪が開くにも、天地一杯総がかり、私一人が生きるにも天地一杯総がかり」

これから野山に沢山の花が咲いてきます。その花がひとつ咲くためには、天のはたらき、つまり太陽の光や温かさが必要なのです。さらには適当に降ってくれる雨水がなければ育つことができません。また土の力がなければ、栄養が与えられず立派に大きくなることができません。それらのものが総がかりで一輪の花を咲かせているのです。それと同じように、私と呼ばれる一人の人間が生きて行くのにも、空気や水や食べ物ものが総がかりで私を生かしてくれているのです。さらに人間には家族や友達の力も必要なのです。そうすると、私が生きているというよりも生かされているというのが事実なのです。仏教ではそれらはすべて縁と呼ばれているものなのです。だから私は縁によって成り立っているもの、縁起生の存在とされているのです。

小学校へ入学すると、あちこちの幼稚園から新しい友達がたくさんやってきて、小学校という社会をつくりまします。5歳も上の兄や姉と一緒に生活となるのです。友達も多くなり、周りの環境（縁）が変わります。この周りの変化が、子どもさんたちを成長させるのです。まさに仏教の言う「縁が変われば因（私）が変わる」であります。その中で大きく育っていってくださることを願うのみです。慣れるまでしばらくは、不安や怖さを感じることもあるでしょう。こういう時こそ保護者は子どもさんたちに、より関心を傾けてほしいと思います。深い関心こそ愛なのです。ののさまの教えの通り、いつも笑顔と手を合わせることを忘れないでおおきく育ってくださることを楽（ねが）っています。